

## 病気様、ありがとうございます

雲仙・普賢岳噴火被災地の反対側有明町に優れた特別養護老人ホームびやうろう白光苑がある。その菊池苑長が八十八歳の老女の言葉を広報紙で紹介されている。Kさんは最重度の障がい者。

「もう何もできなくなりました。これからはありがとうと言うのが私の仕事です。私はこんな病気になって初めて本当に心の底からありがとうと言えるようになったんです。

人さまのご親切に対し、返礼のできる力がある時のありがとうは、まだ本当のありがとうではありませんでした。一から十まで人さまのお世話がないと生きられないようになって初めて、心の底からありがとうが言えるようになりました。こんな嬉しい気持ちになったのも、この病気様のおかげです」と。

ひとは老いてこそ本当の学習をする。わが生命が本当の場面に直面するからである。その場面とは老いと死である。老、死、病から離れた知識文化は本物からは遠く隔た

っていることを知るのは、老いの段階に至ってからである。たしかルソーは「ひとが生きているのは二十歳代、たかだか三十歳まで、後はそれまで仕入れたものを小出しにして生きているだけだ」と。

知識、学問の学習についてはその通りで、若き日は豊饒ほうじょうと蓄積にあふれている。しかし、真実の学習は生を終えるまで続き、最後の時にやっとひとそれぞれの結実をみる。Kさんは「こんなうれしい気持ち」とすべてに感謝、至高しこうの境。ホームのKさんへの小さな支えも見え隠れする。

(一九九四年七月二十五日)